
WAR

ねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WAR

【Nコード】

N5210Y

【作者名】

れん

【あらすじ】

銀色の髪に、深緑の瞳を持つ魔族「リユタウ」

そして黒髪に、焦げ茶の瞳を持つ人間「アスラ」

人間は魔族の風貌が異質故に忌み嫌い、魔族は人間のそんな扱いを恨んでいた。人間と魔族の境界線は越えることができない、それが常識。

だが、その常識を一人の少年が打ち破る。

「ねえ、アスラとリュタウは何が違うの？」

少年の問いは、誰にも届くことがなかった。

「ねえ、風貌が違うのがそんなにダメなの？」

少年は好奇心故、並はずれた疑問を持つ。

「ねえ、なんで戦争をしなくちゃいけないの？」

昔話

昔々、あるところに、人間が創られました。神は人間に知恵を与えました。

人間として産まれた一人の男が知恵を使って考えます。

「どうしたら、この大勢いる人間の頂点に立てるだろう」

男は思いました。

もし人間の中で俺が一番強いと知らしめれば、刃向かう者はいなくなるのではないかと。

そして男は武器を得て、人間を一人殺しました。

大勢いる人間は最初は反抗していたものの、武器を持つ男を恐れて反抗しなくなりました。

男はついに、人間を統べる王となったのです。

男の独裁政治は終わりません。

多くの人間を奴隷とし、玉座にふんぞり返るようになりました。

そうして酷い独裁政治が延々と続く中、その政治が大きく変わる事件が発生しました。

「な、なんだ。お前ら。さっさと持ち場につかんか!」

男の前に、およそ三十人ほどの人間が立ちはだかったのです。

さすがに三十人いると弱気になり、男は必死に命令します。

ですが、目の前の人間は動こうとさえしません。

三十人ほどの人間は、皆ローブを着て、深くフードを被っていました。

その服装に男は首を傾げながら、深く考えずにいました。

先頭に立っていたフードを被る人間が言いました。

「もう、お前の言うことは聞かない」

「な、なんだと?」

男は動揺しながらも、なんとか平静を保っています。

「お前が持つ武器は、もう意味を為さない」

「どう言うことだ?」

男は首を傾げます。フードを被る人間は、続けて言いました。

「武器よりも、強い力を手に入れた」

人間はクククツと不気味に笑って、フードに手をかけました。

後ろにいた多くの人間も同じようにフードに手をかけます。

ますますわからなくなりました。

人間はフードをバサツと払うようにとりました。

続けて後ろにいた人間もフードをとります。

「な、なな・・・なな・・・!!」

男は人間に指をさして後退しました。

「な・・・ば、化け物!!」

男はそのまま情けなく人間たちに背を向け、走り去りました。

三十人ほどいた人間は皆、人間の姿でした。それは人間と変わりません。

ですが、その風貌は『異質』で、その人間たちの共通点は

銀色の髪に、

深緑の瞳。

「化け物？誰が？」

ポツリと誰かが呟きます。

「もし私たちが化け物なら、アナタは何なんだろうね？」
クスクスと響く笑い声。

「人間を殺すことを迷わない、アナタも立派な化け物よ？」

アスラは同族同士とでさえも争う

リユタウ
魔族と呼ばれるようになった銀色の髪に深緑の瞳を持つ人間。

同じ人間には変わりないが、その風貌故に人間アスラに忌み嫌われた。アスラはリユタウを蔑み、森の奥底に追い詰める。

リユタウは森の奥底に追い詰められ、一人、また一人と森の中へ消えていった。そして、二度とアスラの住む土地には近づかなかった。

アスラは喜んだ。

やっと化け物がいなくなる、と。

リユタウが忌み嫌われるのは、風貌だけではなかった。

その風貌に加え、不思議な力も持ち得ていたのだ。そのため、独裁政治に屈服する必要がなくなり、ついに反抗を始めたのだった。

今となってはそれも昔の話　・　・

アスラはリユタウによって独裁政治が壊れて、救われたのだと言っても過言ではないのだが、アスラはリユタウへの感謝の気持ちを忘れ、リユタウを恐怖のままに拒んだ。

そしてアスラは自らで平穏を手に入れた。手に入れた筈だった。

「かすね
上総様」

「なんだ？」

男の声が部屋全体に響く。部屋は広く、豪華な装飾が施されていた。男は無表情のまま、目の前に立つ人影に声をかける。

「国民がまた城に攻め込んできました」

「適当に処理しておけ」

「わかりました」

上総と呼ばれた中年の男は、首を横に振った。

「しかし、わからない奴らだな。抵抗すれば死しか選択できないと言っのに」

上総はククツと笑い、「なあ？八頭やづ」と無表情の男に同意を求めた。八頭と呼ばれた男は、なんの疑問も持たずに「はい」とだけ言う。

「お前は本当に、愛想がないな」

「申し訳ありません。生まれつき、こんな顔でして」

「顔のことは言ってないが？」

「申し訳ありません」

八頭は声色を一切変えず、上総に向かって謝り続ける。八頭の声が棒読みに聞こえてくるくらい、感情は一ミリも込められていなかった。だが、上総も八頭の性格はわかっている。元々こういう人間なのだ。

「ところで上総様」

「なんだ？」

「魅楼みろう様が、どこにも見当たらないのですが」

八頭の声がこの広い部屋に、やけによく響いた。

「おかしいよ、飛鳥あすか」

「なんですか？」

「なんでリユタウが悪い奴らだっって言い切れるの？」

広い草原に小さな少年と、飛鳥と呼ばれた二十歳前後の女性が座っていた。

草木が生い茂り、頭上は視界いっぱい大きな木の枝に葉が広がっている。

「私もわかりません、でもそれが『常識』ですよ？」

「なんで、なんでさ!!」

「ほらほら、駄々こねてないで部屋に戻りましょう？上総様に叱られてしまいますよ」

少年は尚もジタバタと暴れ、飛鳥は困り果てたように眉を下げた。

「アスラがリュタウを忌み嫌うように、リュタウもアスラが嫌いなのでしょうかね。だから、仲良くできない。そんな理由じゃダメですか？」

飛鳥の言葉に少年は頬を膨らませる。

「俺、そんなの納得できない」

「ふふ、アナタは優しいですね」

「優しい？」

少年の言葉に飛鳥は柔らかく笑い、ゆっくりと頷いた。

「そうです。その優しさが、時には自身を苦しめることもあると思います。でも・・・」

「飛鳥？」

「ですが、魅楼様はそれでよいと思っています。次期王である魅楼様が、この国の王になる時には・・・この国は幸せでしょうね？」

飛鳥は苦笑し、魅楼と呼ばれた少年の頭に手を乗せ、優しく撫でた。

「魅楼様。その性格故に、苦しむこともあると思います。辛くなることもあると思います」

「飛鳥？どうしたの？何言ってるの？わからないよ」

「でもどうか、今持つその想いを
ね」
・・・忘れないでください

ねえ、なんで？なんで飛鳥は死んだの？

父上、アナタは何を隠しているの？何故昔のように俺の顔を見ないの？

父上は『飛鳥は事故死した』と言ったけど、本当は事故でないことを知っている。飛鳥の死体は、切り傷によって死んでいたから。父上は何故このことを隠す？

最後に俺が飛鳥と一緒にいたとき、飛鳥の様子が変だった。もしかして、飛鳥は自分が死ぬことを
殺されることを知っていた
のだろうか。

「ははは、五年経った今でさえ、？あのとき？の会話が夢に出てくるなんて」

少年　・・・魅楼は困ったように笑った。

？あのとき？よりは、体つきも身長も成長している。飛鳥が殺され、五年が経った？今では、昔飛鳥が言っていたことも、ほとんど理解できる。

飛鳥は知っていた。

アスラの国が、魅楼の父にして今の王　　上総によって独裁されて
いてしていることを。

魅楼は十四代目の？後継者？であった。後継者、それは神の生まれ
変わりとされる存在。

アスラの国に伝わる伝説には、神の？後継者？と呼ばれる者がこの
世に産まれたなら、国は安寧の地となって人々に平和をもたらす、
とそう書いてあった。そのため、？後継者？は王となって国を治め

ることを役目とし、国民に崇められる存在となっているのだ。後継者は代々、金色の髪に夕焼けのように鮮やかな紅い瞳を持っている。そして、魅楼は生まれつき？そう？だったのだ。アスラは黒髪、と決まっているのに。

「もう、こんな瞳の色、嫌だ」

魅楼はボソリと呟くと、片手で顔を覆った。

「そのようなこと、上総様の前では言わないでくださいね」

「八頭、か。別に、父上は俺のことなんて気にしないし」

「そんなことはありません。上総様はこうして私に、アナタを探すように言ったではありませんか。魅楼様、帰りましょう。上総様がお待ちです」

「どうせ、？後継者？として王位を継げって言うんだろ？ヤダよ、そんなの継いだって、この城が護られるだけで、国が救われるワケじゃない」

「それでよいじゃありませんか」

八頭は淡々と言った。

「魅楼様と王族が安定すれば、それでよいじゃありませんか」

「それ、本気で言ってるの？」

「私が嘘をついたこと、ありましたか？」

「八頭って本当、性格悪いよね」

「お褒めに頂き光栄でございます」

「褒めてない」

魅楼は首を横に振ると、ため息をついた。

そして、何かを思いついたようにバツと顔を上げると、八頭に向かってこう言った。

「八頭、あのさ」

「なんでしょう」

「俺がもし、『この城を出て戦場に向かう』って言ったら、八頭は止める？」

「止めるでしょうね。その行為が私の責任になるのはうんざりですし、上総様に探すように命じられれば逆らうわけにはいきません。心底面倒です」

「あ・・・そう」

あくまで自分の都合なワケね、と魅楼は半分呆れながらため息をついた。

八頭は昔からそうだった。

飛鳥と違って自分のことしか考えず、いつも冷静で、顔色一つ変えない。

仕事が達成できれば、なんでもするような 機械のような人間。

「じゃあもし、俺を見過ごすように命令したら？」

「私の主は上総様です。いくら魅楼様の頼みであっても、無理ですね」

「ねえ」

「なんですか？」

「飛鳥は、事故で死んだんじゃないよね」

「・・・」

「飛鳥はもしかして、八頭に殺されたんじゃないの？」

「・・・」

八頭はピクリとも表情を崩さずに魅楼を見つめていた。

反論するつもりはないらしい。

下手な言い訳をされるよりは、そのほうが潔くていいのだが。

今更、恨むこともない。

飛鳥は魅楼にとって大事な存在だった、という事実は変わらない。

だが、今となつてはその想いでさえも薄れてしまっているのだ。そして、会えないと思えば思うほど、夢に出てくる。

「父上の命令、かな？」

「・・・」

「凶星、か」

ふうつと息を整えた。

八頭は相変わらず顔色一つ変えない。八頭にも立場はある、父上が命じたのは知っている。だから、責める気にはなれない。

でも、やっぱり飛鳥を殺したのだと確定したら。

「憎い」

「・・・」

「憎いよ」

「そうですね」

「・・・八頭」

「なんででしょう」

「俺、やっぱりここ出てくよ
決心した。」

「止めるなら、八頭を殺してでも出てく
もう、決心したから。」

「俺、昔は何もわからなかった。飛鳥が何を言っていたのかも、父
上が国民に何をしていたのかも、全部、全部」

無知。

「知らなかった、知ろうとしなかったんだ。だから、飛鳥は伝えようとした。俺が余計なことを考えないように、父上が『飛鳥を殺せ』って命令したんだろ？」

無知故、大切な者を失った。

「俺はもう、二度と大切なモノを失いたくない」

固まった、決心。

「俺は、？次期王？の肩書きを、今ここで捨てる

・・・」

一人の少年が、戦場の中へ。

リュタウは大切な何かを護りながら忘れていく

深い深い森の奥。草木が生い茂り、簡単には進めないような獣道や、棘のある植物が、まるでここを通さないと断言しているように、人間の行く手を阻む。

森には霧がかかり、真っ直ぐ進むことができない道。その森はアスラにこう呼ばれていた。

・・化け物の住処、と。

その森のずっと奥深く、そこには魔族が住む魔法の谷と呼ばれる場所がある。

ウィンダにいるのは銀色の髪と深緑の瞳が特徴的なリュタウ。そして、その中でも？落ちこぼれ？とリュタウの人々に呼ばれ続けている少年が、走っていた。　　・・全力で。

「負ッ・・けるかああああ!!」

そしてその少年を嘲笑うように、小さな少女が銀色の長い髪を揺らしながら顔色一つ変えずに、全力で走る少年の隣を軽やかに走る。

「馬鹿」

「ちょッ・・・なんでそんなッ・・足速いのッ!!」

「出来が違うの、出来が」

少女はそう言うと、ひょいッと足を出す。少年は反応はできたものの止まることはできるはずもなく少女の足に引っ掛かり、派手に転んだ。

ゼエ、ゼエ、と尋常ではない呼吸の音。

少年は顔に砂をつけながら、ゴロリと仰向けになった。ふう、とゆっくり息を整えると、ぼんやりとやけに輝く青い空を見つめながら

笑った。

「ダメだなあ、魔法に頼り過ぎると基礎体力がなくなって」

「基礎体力をつけようと無駄に足掻くお前は馬鹿だぞ、レイン」

レインと呼ばれた少年は苦笑すると、少女に向かって口を尖らせた。
「いいじゃん、ニイナ。それに、なんだかんだ付き合ってくれてるけど」

「気まぐれだ」

寝ころぶレインを見下ろすように仁王立ちする少女　ニイナは、
深くため息をついた。

「こんなだから、下級に？変人？？落ちこぼれ？なんて呼ばれるんだ。アスラなんか気にせず魔法だけを訓練していけば、お前も結構才能あると思うけど。本当、馬鹿だな」

「・・・と、言うかさ、ニイナは何でいつつも、訓練ばっかで走り込んでないのに、鍛えてる僕より走ってられるの？しかも、息切れてないし」

「言ったらろう、出来が違うんだ」

ニイナは鼻で笑うと、レインに手を差し出した。レインは素直にその手を掴み、ムクリと起き上る。羽織っていたローブが、転んだせいで砂まみれだ。

「さすが？優等生？でございますね、ハイ」

「なんだ、そのどうでもよさげな返し」

「いや、なんでニイナは僕についてきてくれるのかなって思った」

「今更何を」

ニイナは自分の銀色の艶のある長い髪をクシヤリと乱し、ため息をついた。

「今更、だるう？」

「そう、だね」

リユタウはアスラに近付いてはいけない。そんな？常識？はレインが産まれた頃にはとつくにあつた。アスラがいかに危険で、横暴で、自分勝手かを両親から伝えられた。

リユタウの中では、アスラは何があつても許してはいけない存在だそうだ。

それでも、レインは諦めきれなかった。

どれだけアスラは卑劣な存在だと吹き込まれても、思わずにはいられなかった。

レインの好奇心は、大きな偏見を打ち砕く程に強かつたのだ。

そして、それ故レインは？変人？と呼ばれる。

変わり者。アスラを嫌わなければ？普通？にはなれない。レインには、そんなことはできなかった。アスラが何故そこまで嫌われるのか。レインは取って付けられた噂や伝説には目もくれず、根本から考えている。

？落ちこぼれ？

リユタウには生まれつき『性質』というモノを持ち得、それを知り、使えるようになれば『一人前』と呼ばれるようになるのだ。

だが、レインはそれを見つからない。と言うよりは、見つけようとならないのだ。

薬の調合や、ある程度の知識はある。もともと『性質』を見つけないだけで、本をたくさん読むことから雑学だけはよく知っているのだ。

だが、レインはアスラに近付くことを願つた。魔法を使わず、人間として生きたいと強く願つたのだ。それ故、魔法は使わない。

一方ニイナは違つた。

？優等生？と、そう呼ばれる。魔法や基本的な知識を学ぶ場所はある。ニイナやレインのようなリユタウの若者は、そこに通うことを

義務付けられている。そして、ニイナはそこでとても優秀な生徒として一目置かれている。実践でも、知識でも、体力でも。全てにおいて、完璧な成績を残すのだ。

レインとニイナは幼馴染であり、ニイナはレインの数少ない理解者の一人だった。ニイナがレインの隣に並べば、明らかに目立つのだ。

『優等生』と『劣等生』

事情を知らない赤の他人が見れば、何故一緒にいるのかわからない程、なんとも奇怪な光景である。その二人が並ぶ光景は、ある意味よく目立つのである。

「どうして、リュタウとアスラは戦うんだらう」

「愚問だ」

「そうだね」

レインはニイナの素っ気ない返しを気にも留めず、眉を下げて弱々しく笑った。

「いずれ、僕らも戦争に参加しなきゃいけない」

「・・・」

ニイナは何も答えない。何も答えず、嫌に輝く青い空をじっと眺めていた。

「なんで、争わないといけないのかなあ」

「・・・レイン」

「僕もニイナも、皆も・・・死ぬかもしれないのにね」

「レイン」

「あはは、僕は真つ先に死んじやいそうだなあ」

「レイン・・・ッ！」

ニイナは少しだけ眉を潜め、地面に座り込んで淡々と話すレインの肩を、力強く引つ張った。レインは何の抵抗もせず、ニイナに引かれるがままに倒れ込んだ。

「泣け」

「なんで？大丈夫だよ」

ニイナはぎゅうつと倒れ込んだレイン体を抱きしめ、一言。ニイナの言葉は時折命令のようで、傍はたから見ればなんと理不尽な奴なんだとよく言われる。それでも、付き合いの長いレインはわかる。ニイナは気を遣っていた。

レインはニイナの言葉に苦笑し、ニイナの頭を撫でる。

「戦争は上級フイドしか出ない。お前みたいな？落ちこぼれ？は、頼んだつて戦争には出してもらえないさ。死に行くようなモノだから」

「でも、ニイナは・・・」

「気にするな」

レインの言葉を強制的に遮ると、ニイナは立ち上がった。レインが見上げる中、ニイナはそのまま手をひらひらさせると、「用事ができた」と言つて背を向けた。ニイナは長いウエーブがかかった銀色の髪をなびかせ、どんどんと見えなくなつていった。

「ニイナは、フイドじゃないか・・・」

ニイナが羽織っていたローブ、その襟元についていた立派な装飾と
勲章。それは、戦争の参加の対象となる、フィドの証だったのだ
・
・

大切なんだ、大切だから。

少年は、少女を追いかける。

戦場を駆けるアスラの若者

走る。走る。

ただただ、城から遠ざかることだけを目的にして、少年は走る。

人間の里アスラの中で、最も大きく、最も立派な建物。そして、先ほどまで自分がいた場所。

少年　　・・魅楼は、必死に走った。そして、ふと足を止めて振り返る。

あれだけ大きくて、あれだけ目立つ城はもう見えない。追手も来ない。

？後継者？がいなくなったとあらば、国王である父は自分を探すだろう。？後継者？があつて、王族があるのだから。父　　・・上

総は、？後継者？あつての王だから。

「なんで、止めなかったの？」

城にまだいるであろう八頭に、心の底から問うた。

何故、何故止めなかった？

八頭が仕えるのは上総であり、魅楼ではない。八頭は魅楼が逃げ出そうとしていることを知っていて、上総であれば魅楼を捕えるように命じたはず。八頭もわかっているはず。

それでは、何故捕えなかった？

城から出ると宣言し、八頭が自分を捕まえるなら全力で抵抗しよう。そう思っていた。八頭は強い、魅楼が勝てる相手ではない。それでも、全力で足掻こう、そう決めていた。

「・・・八頭」

罪滅ぼしのつもりか？

自分から飛鳥を奪ってしまったから。だから、八頭は自分を見逃した。

そこまで考えて、首を横に振った。

違う、八頭はそんな人間じゃない。

自分のことだけを考える、冷酷で残酷な人間。だが、恩返しはきちんとする。几帳面な面や、計算的な面も見られる。魅楼は、八頭が人間として好きな方だった。

「ワケわかんない・・・」

ギリッと奥歯を力いっぱい噛みしめる。

八頭はときどき何を考えているのか、さっぱりわからなくなる。そこは、苦手だ。

「これから、どうしよう」

勢いで飛び出してきてしまった。

どこに行っても追手は来る。？後継者？を受け入れてくれる、馬鹿な人間はいない。？後継者？という厄介な存在、受け入れてしまえば厄介を招くのと同じことなのだ。

「あ、髪の色」

黒髪が通常のアスラの里では、金色の魅楼の髪はよく目立った。今は逃亡の身だ、目立ってはいけない。服も、？後継者？相応の豪華な服。ここら辺では、目立ってしまう。

どうしよう、脱ぎ捨てるか？

考えに集中していたのか、前に人がいることに気付かずにつづかっ
てしまった。魅楼は勢いに負け、尻もちをつく。そして上を見上げて
即座に謝った。

「・・・すみませんッ」

「あ、悪い」

声が聞こえた。

太陽が目の前で輝き、光で顔がよく見えない。だが、人影が喋っていることはわかった。

「いえ、前を見てなかったこつちが悪いんです。すみませんでした」
「こつちこそ、悪かったな。ホラ、立て」

声からして、男だということはわかった。それも、魅楼と同じような年ごろの若い少年。少年は魅楼に手を差し伸べると、魅楼の手を掴んで引つ張った。強い力に引つ張られ、魅楼は引かれるままに立ち上がった。

・・・力が、強い。

同じ年ごろの少年が、予想以上に力が強いことに驚く。

城下では、これくらいが普通なのだろうか。

城の中に閉じ込められていた魅楼には、わかるはずもなかった。

立ち上がると、ようやく相手の顔が見えた。相手の少年の特徴は

・・・傷。

左の頬に、古い切り傷。

「ああ、この傷か？」

少年は魅楼の視線に気付いたのか、左の頬の古傷を撫でると笑った。

「ちよつと昔、油断してたときにザツクリ、な」

魅楼にとって笑い話ではないのだが、少年はケラケラと笑った。

アスラの里の治安はよくない。？後継者？率いる王族が裕福な暮らしをしてくることができたのは、アスラの里が廃れて貧乏だったからなのだ。アスラの里の住民は、王族による奴隷制度や重税のせいで苦しみながら生きていた。治安が悪くなれば、窃盗や殺人も少なくなくなる。アスラの里は、まさに弱肉強食の世界だったのだ。

少年は「ん？」と言うと、魅楼の身なりを眺めた。

「おいおい、なんつう格好してんだ」

「え、あの・・・何か、変・・・かな？」

少年の言葉に、魅楼は首を傾げる。少年は首を横に振りながら答えた。

「いや、変じゃねえよ。お前、旅人か？知らねえなら教えてやる。

ここはジャンクっていう治安の悪い場所だな、見ての通りなんも無い。ここにはどっかから流れ込んできたゴロツキや、窃盗犯がうるついでやがる。お前のその服、身ぐるみ剥がされる前にとっと隠した方がいいと思うがな」

「この、服？」

「この布、良い生地だな。この装飾も、巷じゃ高く売れる。お前みたいにな弱そうな奴、一人で出歩けばすぐボコボコにされて身ぐるみ剥がされちまう」

要するに、治安が悪いばかりに、上等な持ち物を強奪して売りさばくような輩がいる、と。

知らなかった。城の外は、こんなに危険だったんだ。

何も考えず、馬鹿みたいだ。

喧嘩なんて、したことない。殴り合いなんか、死闘なんか
. . .
したことないのに。

「ほらよ」

バサリと何かが見界を遮る。

魅楼はいきなり真っ暗になって驚き、バタバタと暴れると少年の声がした。

「俺のマント、貸してやる。とりあえずフードもついているからな、

お前のその髪も隠せ」

少年は目の前にいる人間が、国を動かす？後継者？だということに

は気付いているのか、それとも気付いていないのか。羽織っていたマントを魅楼に被せ、身なりを隠すように言った。魅楼は言われるがままに服や髪を隠す。

「その髪、瞳の色も。お前、『混じりモノ』だろう？ 苦労してんだな」

混じりモノ。

稀にいるのだ、黒髪とこげ茶の瞳ではなく 変わった色を持つ人間が。そして、その姿形が違うモノとは相容れない、そうとでも言うように人間はそれ故争い合う。

混じりモノは本来、異国同士の人間が産む子に出る。旅人でも、混じりモノは結構多い。その姿から、国や里から追い出されてしまうのだ。

どうやらこの少年は、自分を混じりモノだと思っっているらしい。まあ、後継者と騒がれるよりは、そう感じてくれた方が都合がいい。それにしても、この少年は珍しいくらいに優しい。優しくて、なんか

「俺は霧澄きりすみつてんだ。お前、名前は？」

「え、えっと・・・うーん、と」

本名を言ったらまずいだろうな。多分、後継者だとバレてしまう。

「あ、飛鳥」
しまった。

咄嗟だったから、飛鳥の名前出しちゃった。とりあえず少年

霧澄は、「よろしくな、飛鳥」と笑って魅楼の手を握った。

魅楼も汗だくになりながら、乾いた笑いを零したのだった。

「おい、霧澄」

た。そしてフードを被っている魅楼の頭をガシリと掴み、「ほう」と頷いた。

「飛鳥、な。俺は紅蓮、得物は大剣だ」

「ラタ？」

「こいつのことだよ」

背中に背負う先ほどの大きな剣を手に取り、地面に突き刺した。剣は地面に刺さり、地面には亀裂が入る。霧澄は呆れるようにため息をつく。「素人に得物を説明して、どうすんだよ」と言った。

「いいじゃねエか。ラタは俺の自慢の剣だ、持ってみるか？」

「え、あ・うん？」

魅楼は訳が分からないまま、地面に突き刺さった剣を手に取る、が。

「ん、んんん・・・ツ・・・!!」

抜けない。

びくともしない。

紅蓮が軽々持っていたラタは、魅楼が持つことを許さないかのよう
に動かない。

「無駄だよ、ラタは紅蓮にしか持てない」

霧澄は苦笑しながら背中に手を添え、宥めるように魅楼に言う。

「て、言うかさ。二人とも、何で武器持ってるの？」

魅楼は悔しさのあまりに話を逸らす。紅蓮はそれを聞き、ニツと笑った。

「ん？そりゃ俺たちが、魔法使いと戦う戦場の兵士だからさ」

「え・・・」

「馬鹿、紅蓮！お前、それバラしたらダメじゃねえか！！」

霧澄の制止も聞かず、紅蓮は自慢げに口を開く。

「そして飛鳥、お前と喋ってたこのチビは、その戦場で大活躍する第十三隊の隊長なのさ」

偶然なのか、必然なのか。

強く決心するリュタウの若者

一人立ち尽くしていると、背中にトンと微かな衝撃があった。それと同時に葉煙草のニオイが鼻をくすぐる。煙草の中でも独特なニオイがする種類の葉煙草、そしてその煙草を吸うのは
魔法を学び訓練する場所、魔法塾の教師であるマシロだった。

「マシロ先生」

「よ、レイン。何ぼうつと突っ立ってんだ？」

「いえ、なんでもないです」

素っ気なくそう言うと、レインは立ち去ろうとした。だが、マシロはそれを許さない。

「ちよつと待てって」

「なんですか」

「お前さ、ちよつと吐け」

「嘔吐しろと？」

「違う違う、そういう意味じゃねえよ。誰がお前の嘔吐物なんか望むかよ」

「じゃあ・・・」

「ニイナのこと、気にしてんだろ？」

マシロはレインの手を掴むと、ぐいっと引っ張った。

「塾来いよ」

「まさに、職権乱用ですかね」

魔法塾の武器庫の中にある階段を上がると、小さな扉がある。

その小さな扉の中には、マシロが常日頃職務をサボる時に使う部屋

があった。

部屋は大きくないが、大人が三人ほど入るスペースがあった。マシロは「そこ座れ」と言い、どこからから持ってきたのかお茶を出してきた。お茶から出て揺らぐ湯気をぼつと眺めていると、マシロもドカリと座った。

「まあ、お前がこの部屋をバラさないと信じて招いたんだ。誰にも言うなよ?」

「教師がこんなことしていいんですか」

「馬鹿言え、塾長はとつくに知ってる。ただ、この部屋は使わないからって俺にくれた」

「まったく」

レインは呆れてため息をつくとき、マシロは軽快に笑って言った。

「戦争は、怖いよな」

さすがに、直球でくるとは思わなかった。

マシロの言葉に少し動揺していると、マシロは言葉を続けた。

「ま、お前はまだ参加もできんが」

レインは下級クランであるため、戦争の参加はできないのだ。

できるのは上級フイドまで　　・ ・ ・つまり、ニイナは該当してしまう、ということ。

「怖いのは、ニイナです。僕はクランだから、戦うことができないできないから、もどかしいんです。レインはそう言って笑った。

「それより、どんな風の吹きまわしです?先生が、生徒の精神的ダメージを癒す為にわざわざ個人面談までする人じゃないはずです」

そうだ。

マシロはそんな人間ではない。マシロは教師としては問題児とまで言われるほどサボり癖があり、何に対しても面倒だと言って仕事を断るような、不真面目極まりない人間。

誰かに頼まれたって、自分への利益がなければこんなことはしないだろう。

「ひでエな、そんなこと言うとは。先生、悲しいぞ」

「そう言うこと言わせるような行動とってるからです。サボって渡り歩ける程、社会は甘くないですよ」

「生徒にそんな説教受けるとはな」

マシロはガサゴソと懐から葉煙草を出すと、口に啜えた。

「確かに、柄じゃないよな」

葉煙草に指をつけると、ジジジ・・・と音がして燃えた。レインは顔をしかめると、「窓開けてくださいよ」と言いながら、近くにあった小窓を開けた。

「お前に報告をしようと思ってな。表でするような報告じゃねエから、俺の秘密基地に案内したってわけだ。とりあえず、聞け」

「いい年こいて、秘密基地って言うのに抵抗ないんですか？」

「俺はまだまだ若い」

「今年26でしょ？僕にとってはオジサンですけど？」

「お前、ちよつと黙ってる」

マシロはふるふると震えながら、地の底から響いてくるような低い声でレインを怒った。レインはビクリと肩を震わせ、ふうつと息をついた。

「なあ」

「はい？」

マシロは不意にレインに声をかけ、レインは少し驚きながらも答え

た。

「お前、戦争に出てエのか？」

「は？」

「YESかNOで答えろ、他の答えはいらねエ」

「なんのこ」

「他の答えはいらねエ」

レインの問いに答える気はさらさらなのか、レインの動揺している顔に目もくれずにただジッと答えを待つマシロ。レインは目を伏せた。

何言っただらう、この人は。僕はクランだから、出たくても出れない。出れたとしても、戦争は怖いじゃないか。出たくないに決まってる。

でも、でも・・・ニイナは？フィドだから、あんなに若いのに戦わないといけない。いつだって僕を支えてくれたのはニイナだよ。

なのに、チャンスがあつたとして。

僕は何を安全地帯で震えあがってるの？

出たい。

出たくない。

出たい、出たくない、出たい、出たく

・・・

「出たいです」

手が微かに震えている。

恐怖？それとも、武者震い？

そんなことはどうだっていい。

マシロはジツとレインを見つめ、「ふうん」と呟いて頷いた。そのまま何かを考え動かなくなったのを見て、レインは派手に舌打ちをした気分だった。

何だ、言わせるだけかよ。

「じゃあ、出る」

「は？」

マシロの不意な返答を聞き、首を傾げた。多分、今自分の顔はアホ面だろう。

「上から命令が出たんだ。？クランである塾生、レインの戦争参加？が決まった」

「何故？」

「戦力が足りない状況でな、フィドだけじゃリュタウが負ける」
「だったら　・　・　・　　だったら、中級から選ぶだろ！？」

焦りと驚愕、そのせいで敬語なんてすっ飛んでしまった。

でもそうだ。だったら役に立たないクランより、少しでも戦力になるイースを選ぶはず。

マシロはレインの言葉を聞き、舌打ちをした。

「なんだ、戦争に出てエンじゃねエのか」

「でッ・・・出たい、けど」

「だったら、つべこべ言わず準備しとけ。じき、訓練招集がかかる」
「ちょッ・・・話はまだ」

終わってない。

なのに、マシロはそのまま部屋を出て行ってしまった。今の話の切り方は少し違和感があった。まるで、詮索されたくないとも言っているように、強制的に終わらせた。

「なんで」

出たかったのに、急に怖くなる。

死と隣り合わせだなんて。これから、死を覚悟しなければいけないなんて。

手だけでなく、体も震え始めた。背中に、寒気が走る。

「なんで、僕が」

戦争に参加する、なんて選択肢は入っていなかった。だから、安心していったんだ。

ニイナを心配するどこかで、安心してしまっていた。戦争に参加する必要はない、と。

「僕は・・・」

ニイナはずっとこんな思いだったのか。

それでも、ニイナは顔に表さない。表わさず、逆にレインに気を遣って。

僕は出られないことに安心し、支えられないことの言い訳にしていた。
体のいい言い訳。

「情けない」

女の子なのに、ニイナは強い。

「情けない」

ずっと隣にいたのに、知らなかった。

「情け、な・・・い」

ニイナは、ずっとずっと・・・強くて、揺るがない。

「僕は、支えられるかな」
こんなに弱いけど、脆いけど。数少ない理解者であり、幼馴染なんだ。

このまま、ニイナが戦いに行くのを、黙って見てるだなんて。
「あり得ないから」

僕も、行くよ。

決心。そして、決意

・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5210y/>

WAR

2011年11月20日21時10分発行